

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	7月号 2010年7月18日
----	---------------------	-------------------

キリスト者の祈り、「賛美」と「感謝」

M.M

主日礼拝では立石牧師からハイデルベルグ信仰問答について説き明かしを受けていますが、問答の最後「祈りについて」(問 116～問 129)の説教を聴きながら思いめぐらすことが増えてきました。そこで今回は「祈り」について思索してみたいのです。

キリスト者に限らず、「祈り」とか「祈る」とかの言葉は誰もがふだんから口に出している。人は困ったとき、悩みあるとき、強く願うとき、思わず「祈り」たくなるものらしい。日本では、ふだんの挨拶やコミュニケーションの中でも「祈ります」などと言ったり、書いたりする。その多くは、願望や希望の表明である。こうなれば幸いである、このような悩みや問題を解決してほしい、などなどの願いであり、それを誰に対して願うとも明らかにしないで「祈る」言葉に込める。それを聞く人も「誰に対して祈っているの?」などと野暮なことは問わず、「ありがとう」と答える。考えてみると無責任な、あるいは無効な「祈り」である。

もう一つ、最近久しぶりに再開した旧友と散策していた時の話。友人は、途中の神社で例によりガランガランと鈴を鳴らし、パンパンと柏手を打ってから神妙な顔つきで「祈っている」。少し離れた所で眺めているわたくしは、友人に、何を祈ったのか、なぜ神社に来るとその気になるのか、願いは適えられると思っているのか、などなど口には出しにくい疑問が湧いてきて仕方がない。

しかし、考えてみるまでもなく、そのような質問や疑問を発する者こそ彼らにとって「?」な存在なのかもしれない。キリスト者はいつでも、どこでも「天にましますわれらの父よ」と祈ることができる。祈りを捧げるお方と、祈る言葉を与えられている。そして、主イエスは「わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう(ヨハネ 14:14)」と約束してくださっておられる。この大きな恵みに深い感謝を覚える。そして「感謝」こそがキリスト者の祈りの核心であり、特質であると教えられる。(ハイデルベルグ問 116)

わたくしは若いころに改革派教会に誘ってくれた友人の言葉を心に刻み、今でも実行しようとして心がけていることがあります。それは、キリスト者はどのような時にも「主の祈り」を意識し、「主の御名を賛美し喜ぶこと」と、「みこころが成りますように」との祈りから始めるべきであるとの奨めでした。奨めにしたが、礼拝での公同祈禱では詩篇を引用しながら主の聖なる御名をほめたたえさせていただき、次に「感謝」を、それから「願い」の祈りを捧げるようにしています。「願い」の祈り、「個人の祈り」については、稿を改めて書くことにしましょう。

教会教育の課題をちょっと

T.G

先日、東部中会教育委員会の教会教育部門に参加してきました。11月に行われる「教会教育研修会」についての会でした。この研修会は「教会学校教師研修会」として行われていましたが、昨年度から、もっと大きな枠組みで教会教育について考える会として開催し、今年は第2回目です。横浜中央教会からは河西長老が担当委員として参加していますので、この会の趣旨など詳しいことは河西長老に聞いていただき、この稿では教会教育部門に参加した感想を書いていきたいと思います。

今回この話し合いには、実際に教育の現場や保育の場で働いている人から知識や技術を学ぶために、実演をしてほしいということで呼ばれました。横浜中央教会だけを見てもかなりの数の方が教育関係に従事しています。そのような中であって、まだまだ経験の浅い自分が呼ばれてしまって大丈夫だろうか、という思いをもちつつ話し合いに参加してきました。

最初に、担当教師の鈴木先生がこの会の趣旨や意義について述べてくださいました。その中で印象に残ったことは、教会教育を考えることは改革派教会全体を考えることだ、ということです。特に、教会学校の問題は切実で、実に8割の改革派教会で教会学校が崩壊しているとのことでした。また、契約の子の教会離れも深刻な問題です。このままでは改革派教会は衰退の一途をたどるしかないと思われました。教会学校が成り立たなくなってしまった原因は様々あると思いますが、私たちはその原因を探り、それに対して一つ一つ対応策を考えていかなければならないと思います。

幸い横浜中央教会は近隣の私立小学校から多くの子ども達を送っていただいています。しかし、その現状に甘えてはいけないと思います。まだまだ改善する必要があることがたくさんあります。例えば、低学年から中学年にかけて通っていた児童が高学年になるにつれて足が遠くなり、小学校を卒業するとぱたりと来なくなるということ。それに伴って、中高生が少ないという現状もあります。現在は中学1年生が学校の課題やおすすめで来ていますが、どこまで続けて来てくれるか分からないところもあります。

まずは目の前の課題と格闘しながら、中会全体を見渡す大きな視点も必要なのだと感じました。また、教会の枠を超えて協力する必要もあるでしょう。みなさんと祈りつつ考えていきたいと思います。

私の研究テーマ

K.I

3月に大学院を修了して、岐阜から横浜に帰ってきました。
岐阜でも改革派の教会へ通っていたのですが、初めて行った時にとっても驚くことができました。それは僕が20年も前、横浜英和小学校に通っていた時の校長先生のお兄さんがいらしたのです。非常に驚いたのと共に、言葉は変ですが神様はすごい偶然を演出をされるなと思いました。

さて、今回は大学院で研究していたことについて書こうと思います。学校ではインタラクティブデザインという分野について学んでいました。あまり耳にしない言葉だと思いますがインタラクティブデザインとは、私たちがモノやサービスを使ったり利用するときに、その情報を的確に人間に伝えて、楽しくまたは快適な経験をどうやって提供するか考えることです。

一つ分かりやすい例でシャンプーのボトルを挙げます。普段私たちが使っているボトルの多くは側面にでこぼこした刻みがあると思いますが、あれは髪の毛を洗っている時に眼が開けられない状態でリンスやコンディショナーなどと間違えないために付けられています。非常に単純なことですが、こうした配慮により人とモノ、人と人などのコミュニケーションを豊かにするのがインタラクティブデザインの一つの役割になります。

そして僕が研究していたテーマですが、自分が読んできた本の文章同士の関係性を視覚化(眼に見えるように)し、他の人と共有するというものです。

本を読んでいて「ここに書かれている文章は前に読んだ本に書かれていた」という場面は少なくないと思います。特に聖書では福音書や予言書の参照などで文章の相関関係を把握する機会が多いのではないのでしょうか？

しかし、現在こうした文章同士の関係性を管理するいい方法というのはありません。そこで僕は本を読んで気になったところにキーワードを付けて、同じキーワード同士の文章の関係性を眼に見える形で提示するシステムを制作しました。もちろんこれは紙の本では無理なのですが、電子書籍では可能です。

電子書籍とは電子化された文章とその文章を読む為の小型の端末のことを指します。日本ではまだ馴染みが薄いのですが、アメリカでは徐々に浸透してきており、今年が電子書籍元年になるとも言われています。

電子書籍のメリットとしては、まず必要な箇所をすぐ検索することができ、また文字のサイズを任意に変えられ、そして紙の本のように場所をとったり重くないなどが挙げられます。近い将来、礼拝でも聖書/賛美歌などは電子書籍で見るといった日が来るかもしれないですね。

そして電子書籍によってこれまでの読書ではできなかった経験できるのではないかと考え、先に書いたように文章の相関関係を表し、自分の知識の再構成できるようなツールを制作しました。今日、テクノロジーとは便利な反面あまりよいイメージを持たれていない部分もあります。すべてを迎合する訳ではないのですが、上手に用いることでより人やモノとのコミュニケーションを、またはクリスチャンとしての生活の未来を切り開けるといいなと思うのです。